

The Crisis of Chinese Consciousness
—Radical Antitraditionalism in the May Fourth Era—

Lin Yü-Sheng, *The University of Wisconsin Press*, 1979. xiv, 201pp.

傳統と西歐近代との相關は、中國近現代思想史の最も基本的なテーマである。アヘン戦争以來、砲艦と資本の壓倒的優位のもとに、西歐は強制的に中國をみずからの秩序の中に組み入れ、中國の傳統的價值を浸蝕し崩壊させていった。中體西用論にはじまって、堰を切ったように流入する西歐文明の進出、傳統思想の後退は、清末思想史の一貫する流れであるが、しかしそれがそのまま「進歩」であったわけではない。打ち続く帝國主義列強の侵略と舊支配層の買辦化とは、社會革命と不可分に結びついた民族主義運動を喚び起こし、舊支配層が試みた體制強化のための「近代化」を押し流して、やがて二十世紀後半の世界史的轉換をもたらすのである。

だが、社會革命の思想が、否應なしに西歐近代文明（ブルジョア民主主義からマルクス主義までを含めて）を受容せざるをえなかったとすれば、それが文化をも含めた民族のアイデンティティを主張する民族主義思想と結びつくとき、傳統思想はいかなる地位に置かれ、いかなる役割を果たすのだろうか。傳統というものが、自覺的と無自覺的とを問わず人びとの思考と行動を規定するものである以上、みずからの近代を創出する變革運動の中にはたらく傳統的なるものを自覺的に取りだすことは、アジアの近代の本質に迫る上で、最も重要なテーマとなる。まして中國のように過去に獨自の高度の

文明を築きあげてきた民族にとって、傳統の力は一層強くはたらいているはずである。本書は、この傳統と西洋化（反傳統）の複雑なからみあいの問題に眞正面から取組み、それがもっている現代的意味にまで論及したものである。

冒頭にいう、

「二十世紀中國の思想史における最も顯著でしかも特異な様相の一つは、自らの過去の文化遺産に對する徹底的な傳統否定の (iconoclastic) 態度の出現とその持續である。國家と社會の變革において共產主義革命が成功したにもかかわらず、この新しい秩序は、傳統的な歴史・文化の遺産との關係が不安定かつ極めて不明瞭のままにされている。共產主義中國の指導者たちは、古い中國の傳統に對して、純粹に民族主義的稱揚にとめるよりも、むしろそれを根絶することに没頭してきた。これらの傳統について、かれらは、今日に對する脅威であり、かつ自らの社會主義的未來についてのヴィジョンを實現するための障害であると感じているのである」

傳統否定＝文化革命の強調は、政治的・社會的變革のためには精神の變革が基本的前提條件であるという假定の上に立っている。

「人間の意識こそ、革命を遂行し歴史を形成する上で決定的な役割を果たすものである」という信念が、毛澤東主義の最も特徴的なものであり、同時に二十世紀中國の思想史に貫流している性格であるとすれば、そのルーツである五四期のラディカルな反傳統主義の特徴を解明することは、今日の中國の動向を見る上で重要な意味をもつにちがいない——これが著者の研究のモチーフである。

この解明の方法として、著者は五四知識分子の指導者である陳獨秀、胡適、魯迅の三人における反傳統意識の起源とその性格を比較

することによって五四期の傳統否定主義の多様性と統一性を浮き彫りにしようとする。この三人は、性格的にも政治的にも、また思想形成過程においてもはるかに異っているにもかかわらず、一つの共通の結論——あらゆる變革の前提條件は思想革命であり、それには傳統を全面的に廢棄せねばならぬというイデオロジカルな結論を堅持しているのである。

以上に要約した「導言」に始まって、本書は次のような構成をとっている。

第二章 五四期における全體論的反傳統主義の起源 I

第三章 同 II

第四章 陳獨秀の傳統否定の全體論

第五章 胡適の擬似改良主義

第六章 魯迅の複合意識

第七章 結論

以下、著者の所論の要を紹介して、問題點を考えてみたい。

*

五四期に現われた強烈な傳統否定運動の全體論的性格は、西歐近代思想の受容や進化論の變化の概念のみによって説明することはできない。ここでいう全體論 (totalism) とは、中國の傳統を一個の有機體と見なす見方である。傳統のなかにある多くの否定すべき事物は、決して個別的に存在するのではなく、ある根源的なものから流れ出るのであり、したがって個別の事物の一一の價值を検討する必要はなく、ただ一切の傳統を否定しなければならぬのである。

問題の中心は、五四反傳統主義者たちのこのような見方が、實はかれらが否定しようとしていた傳統的思考様式そのものだったこと

にある。殷周革命以來、「天命」の信仰に支えられた「普遍王權」(universal kingship) の思想は、天子のもとに政治秩序と道德・文化秩序が不可分に統合されたものであり、漢代陰陽五行學說が儒家に取り込まれることによってきわめて精巧な有機體的宇宙論が形成され、これが中國人の思考に深く浸透することになった。この高度の統合性をもった中華帝國は、辛亥革命による王權崩壞によって、たんに政治的秩序のみならず、文化的秩序をも解體させることになる。傳統の内容をなしていた諸觀念、諸價值はすべて自明のものではなくなり、懷疑と攻撃の對象となつて、ここから全面的傳統否定論が生まれるのであるが、一方傳統的思考様式の方は、形を變えて生き續けたのである。袁世凱や張勳の帝制復活の試みもまた反傳統主義者たちのこのような見方を強めるものであった。

いま一つ、かれら反傳統主義者たちに顯著に見られる文化的「主知主義的 (cultural-intellectualistic)」アプローチもまた、中國の傳統思想に深く根ざしたものである。腐朽した中國を再生させるためには、政治・社會・經濟の變革よりも知的・文化的變革こそが重要であるとするかれらの議論は、まさしく傳統中國の文化的特色の一つであった。ここでいう主知主義とは、思想の力を確信する態度である。人は眞理を知覺しさえすれば、それに従つて行動する、という「思想を根本と見なす思考様式」は、孟子以來、朱子學、陽明學、考證學を通じて、傳統儒教の思考様式であった。

一八九〇年代に活躍した中國インテリゲンチヤの第一世代 (嚴復、康有爲、譚嗣同、梁啓超) もまたこのような文化的・主知主義的アプローチを行っているが、かれらはまだ傳統の秩序の中に生きており、傳統のすべての相を有機的統一體の部分と見なすことはな

く、したがってこれらの傳統否定主義は全體論的ではなかった。辛亥革命後、王朝體制の崩壊、それに續く革命の無殘な挫折という現實の中で、中國インテリゲンチヤ第二世代の人々は、このアプローチを極限まで高めて、主知主義的な全體論的思考様式をとるに至ったのである。あらゆる傳統の諸要素は、すべて腐朽した根本思想と有機的な關係をもつものであり、したがってその病毒に侵されている。滅亡に瀕した中國を再生させるためには、あらゆる傳統を全面的に否定する思想革命—文化革命を遂行せねばならない。かくて徹底的・非妥協的な五四新文化運動が展開されるのであるが、このような傳統的思考様式をそのまま殘した傳統否定こそが、まさに二十世紀中國における「意識の危機」をもたらすことになるのである。

*

陳獨秀が五四期知識人の指導者たりえたのは、かれらのなかにあった潜在的な反傳統の傾向に一つの明確な形を與えた點にあり、かれこそ以上に述べた文化的—主知主義的アプローチ、全體論的反傳統主義を代表するものであった。かれにとって儒教は中國の傳統の本質を形成する全體論的統一體であり、したがってその否定も全面的となる。儒教の部分的改革、あるいは部分的評價などは問題にならない。「孔教と歐化とは兩存の餘地はない」のである。陳獨秀があれば徹底的な儒教攻撃を行いがら、その批判が儒教の哲學面にまで及ばなかったのは、儒教の根本思想から派生した社會規範（禮教）が現代生活に不適合である以上、その本源もまた批判するまでもなく不適合であるという全體論的觀點のゆえである。

しばしば傳統文化の改良をめざしたとされる胡適にしても、全體論的反傳統主義の枠を脱け出ているわけではない。むしろかれの改

良主義は中國の全面歐化の手段としての「擬似改良主義 (pseudo-reformism)」と理解するべきである。デューイの「科學的方法」にみずからを同化したのはかれの主知主義的アプローチ（これはその生涯を通じて見られる）によるものであるし、中國の傳統の中から價值ある科學的精神を見出そうとしたのも、その基礎に立って全面歐化（これのみが中國を救済できる）をはかるためであった。

これに對して魯迅の意識の特徴は、傳統破壊の全體論と、ある傳統的價值に對するコミットメントとの間の深刻な緊張にある。かれは表層意識においては傳統的中國文化の暗黒と罪惡を徹底的に攻撃し、しかも獨創的な筆致によってその他の反傳統主義者たちをはるかに超えた成果をあげたが、深層意識においては傳統的なモラルや價值の、あるものによって深く浸透されていたのである。その一つの例が「念舊（古い人間關係へのいとおしみ）」であり、これは儒家的世界觀に深く根ざし、中國人の心に生き續けているものである。魯迅が生涯を捧げた全面的傳統否定主義の運動とこの深層意識とは、全く相容れる餘地がなく、かれの魂の奥底に複雑な衝突を引き起こした。魯迅の思想におけるこの衝突こそ、二十世紀中國における意識の危機を、かれ獨特の形で反映したものである。

*

以上、極めて大雑把な要約を試みたが、細部の實證部分をすべて割愛したために骨組みだけのものになってしまった。全文二六〇頁、細字でびっしり組まれた本書は、中國傳統思想と現代思想との具體的分析を含めて、かなり読みごたえがあり、また著者獨特の用語法もあって、私の語學力を別としても、おそらく難讀書と稱してよいであろう。以上の要約の中にも、あるいは誤讀による誤解があるか

も知れないが、以下、私の読みとった限りで問題点を指摘しておこう。

五四新文化運動が「封建文化に徹底的に反対する運動」とされながら、その「全盤歐化」の主張が持つ脆弱性については、すでに多くの人が論じているし、また陳獨秀や胡適のなかに「士大夫意識」とも呼ぶべき古い思想が生き續けていることもまたしばしば指摘されるところである。かれらの高唱した「民主と科學」「思想革命」「文學革命」が、その實質内容においていかに観念的で空疎であったかは、今日から見れば明らかである。かれらがあれほど舊き中國を憎惡し近代化された中國を熱望しながら、その思想がイデオロジカルなものでしかありえなかったのはなぜか、その理由として、かれらを強固に縛りつけていた傳統的な一元論的思考様式を析出したところに、著者の新鮮な問題提起がある。現代中國のなかに傳統的なものを見出す試みはいくたびもなされてきたが、それらの多くは個別的現象をとりあげ、傳統的なものと結びつけて解釋する傾向が強かったのに對して、五四知識人が共有し今日にまで連續する思考様式として取り出した點が本書の特色である。傳統的思考様式を無意識のうちに取りながら全面的傳統否定を説いた五四思想の不毛性を衝き、このような思考様式の克服こそが傳統に對する創造的轉化(creative transformation)であり、中國における意識の危機を解決する道であると説く著者の主張は、強い同時代的關心に支えられていて、読む者に一種の迫力を感じさせる。

しかしながら本書を通讀しながら常に氣にかかっていたのは、著者が傳統を論ずる場合、ほとんどすべて儒教を對象としており、それ以外のものでも士大夫の教養の範圍内に限られているということこと

である。われわれが現代中國と傳統の問題を考えると、まず思い浮かべるのは、西歐列強およびそれと結託した反動勢力の「近代化」という名の政治的・經濟的・文化的壓迫に對して、「土着」をもって抵抗した農民革命の傳統である。今日の中國について「文學藝術における民族形式」「マルクス主義の土着化」を論ずる場合、この農民の傳統がつねに念頭に置かれているはずである。本書の主題は五四期の知識人の思想を中心にしており、その限りでは傳統の内容は儒教が主要なものとされるであらうが、二十世紀中國の思想史にまで問題を擴げるとすれば、五四新文化運動の啓蒙主義的・近代主義的性格が洗い直された歴史的經過をも視野に入れねばならないであらう。湖南農民運動において毛澤東は「政權、族權、神權、夫權」という封建宗法(そのイデオロギーが儒教倫理)と闘う農民を描いているが、その闘いは、五四の儒教批判とはおよそ異質のものであり、地の底から湧き起こる土着的エネルギーそのものであった。人民中國がこのエネルギーをもとにして成立したとすれば、今日における傳統の問題は、いわゆる「人民」のなかにある土着的傳統を抜きにして考えることはできない。傳統をここまで擴げて考えるならば、傳統の否定を通して傳統を再生させる問題は、たんに儒教を中心としたいいわゆる「傳統思想」に限定さるべきでなく、儒教も道教も、彌勒信仰も拜上帝教も、降神附體も科學精神も、一切合財を含めた中國の「文化」を創造してきた根源的な力が、いかにして自由に解放されるかを考えねばならなくなるだろう。著者の所論が知識人に關して精密であればあるほど、私にはその外に擴がる世界が氣になつてならないのである。

*

著者林毓生氏は北京で生まれ、臺灣を経てアメリカに留學、シカゴ大學で D・Ph を取得、現在ウィスコンシン大學副教授、一九七九年二月ウィスコンシン大學教授代表團の一員として中國を訪れている。著述には本書のほか B. I. Schwartz ed. “*Reflections on the May Fourth Movement*” (Harvard University Press, 1972) に所収の “Radical Iconoclasm in the May Fourth Period and

the Future of Chinese Liberalism” (中文譯「五四時代的激烈反傳統思想與中國自由主義的前途」『明報』一二五～七期、一九七六・五～七) それに未見であるが “Evolution of the Pre-Confucian Meaning of Jen (仁) and the Confucian Concept of Moral Autonomy” (*Monumenta Serica*, Vol. 31, 1974—75) がある。
 丸山 松幸